

2019 年度アデレード大学研修報告

三間 晶生

2020年2月から3月にかけて5週間のオーストラリア海外研修を実施した。これまでも大学開学以来、国際言語文化学部そして国際人間学部のもとで、オーストラリア、イギリス、ニュージーランドなどでの海外研修を実施してきた。そのプログラムの内容は、学部・学科の性格からして英語を専攻する学生が中心であり、主として語学や文化・歴史を対象としたものであった。

2019年度4月より教育を一つの大きな骨子とした学部・学科（人間教育学部 教育心理学科）がスタートすることに向け、2018年より新学部・学科にふさわしい研修地やプログラム内容を含む海外研修の検討を始めた。その際、英語圏の研修地で15名程度、4週間前後、ホームステイできること、2020年2～3月の実施、語学(英語)に加えて教員養成プログラムおよび教育施設訪問(幼稚園、小・中学校など)そしてリーズナブルな費用を条件とした。候補に挙がり交渉をしたいくつかのアメリカの大学については、宿泊がホームステイではなく大学キャンパス内の学生寮であること、結果現地の人々と接触する機会が少なくなるというデメリット、さらに費用面で高くつくこと、またオーストラリアのある大学については教員養成プログラムが導入できないなどの問題が出てきた。

そのような中で、2019年4月に在福岡オーストラリア領事館（当時）の協力を得て、本学の条件に合ったオーストラリアの17教育機関を紹介いただき、それぞれについての詳しい説明を受け、最終的にそこから5校を候補に絞り込んだ。その後、直接それぞれの教育機関に詳しく条件・プログラム内容等を問い合わせ、交渉を重ねた結果、研修地として本学の条件に一番合ったアデレード大学英語教育センター（English Language Centre (ELC), the University of Adelaide）に5月に決定した。相手校にはその旨の連絡と同時に、上記条件の他にさらに、各ホストファミリーの受け入れ学生数を原則1名、提供される食

事は週末も含んで毎日3食、研修期間5週間を追加した。この研修プログラムについては、本学とアデレード大学との研修等に関する協定と覚書を10月に締結・交換した。

学生に対しては新学期スタートとともにいろいろな形でオーストラリア研修を計画していることを伝え、旅行会社が決定した段階で7月初旬に研修旅行説明会を開き、学生に旅程、費用、プログラム内容、出発までの流れ等を含む研修内容を説明し、夏休み明けの9月末に行った参加者最終調査で14名の希望者があった。英語を使つてのオーストラリア生活に慣れるために、参加予定者は必要に応じて「海外研修事前演習Ⅰ」（後期2単位）を受講したり、空き時間を利用して英語教員と英会話の練習をしたりした。しかしながら、諸事情のため当初希望していた学生が何人か抜け、最終的に参加することになった10名（教育心理学科1年8名、こども学科4年2名）は、11月にオンラインでELCでのID作成、英語プレースメントテスト（Oxford online placement test）、ホームステイ申請書およびホスト家族あての自己紹介を含む手紙作成をし、12月に入りETAS（ヴィザ）、海外留学保険、オーストラリア滞在経験のある学生との交流など最終準備にかかり、2月3日の説明会で最終確認等を行う。

ただし、研修日程はコロナ禍のため、復路について最終的に3回変更があった（便、経由、航空会社などの変更）。この変更は学生がアデレードで研修中のでできるだけ混乱を避け不安をなくすため、その都度速やかに、学生、保護者、ELC担当者、ホスト家族に情報を流し、特に学生と保護者には安心してもらう努力をした。引率者についてはもともと交渉の段階からELC側からその必要ないとのことであったが、第1回ということで1名引率者が同行し、現地におけるELC側の学生へのフォロー（授業やホストファミリーとの生活など）が徹底していて安心であることを確認、学生より先に2月21日アデレードを発ち、翌22日帰鹿した。学生は、全員無事に笑顔いっぱい予定通り3月23日に帰鹿した。

学生の旅程は以下の通りであった。

2月15日	鹿児島中央駅発	11:47	博多駅着	13:13	新幹線
	福岡空港発	16:35	香港着	19:30	キャセイドラゴン381
2月16日	香港発	1:15	アデレード着	12:35	キャセイパシフィック177
3月22日	アデレード発	15:30	シドニー着	17:55	カンタス756
	シドニー発	21:35	羽田着(3月23日)	5:00	カンタス25
3月23日	羽田発	8:00	福岡着	10:00	日本航空307
	博多発		鹿児島中央駅着	12:41	新幹線

到着したアデレード空港では、ELC スタッフとホストファミリーが出迎えてくれ、ゲートから出る学生にスタッフが名前を確認しそれぞれのホストファミリーに会わせ、三々五々セレモニーなしで各家庭へと向かった。空港でのスタッフは本学学生のためのスタッフで学生の情報をよく知っており、またホストファミリーとも既知のようで、非常にフレンドリーで手際よい流れであった。東京や大阪からの他大学のグループについても同様のスタッフがゲートでそれぞれ待機していたようであった。

第1日目は、通学の仕方等を教えてもらいながらホストと一緒に登校し、来た順に ELC 前で日本の他の大学や外国から来ている学生と同じグループにそれぞれ入り、アデレード大学の学生による ELC、アデレード大学キャンパス、シティーセンターの説明ツアーに同行した。午後は、アデレード大学内の教室で、授業に対する心構えやオーストラリア、アデレードの文化・社会についての具体的で生活に密着したオリエンテーションを受けた。

2日目からは、プレースメントテスト結果に基づいた午前あるいは午後のクラスにそれぞれ入り、授業を受けた。ELC でのクラスは General English for Academic Purposes (GEA) で 8 レベルに分かれており、上から G5A (Advanced Proficiency)、G5B (Advanced)、G4 (Upper-Intermediate)、G3A (Intermediate)、G3B (Lower-Intermediate)、G2 (Pre-Intermediate)、G1A (Elementary)、G1b (Beginners) となっており、本学の学生はいろいろなクラスに散らばっていた。プレースメントテストの結果だけに基づくのではなく、

できるだけ同じクラスに純心の学生が一緒になることがないようにも配慮されていた。クラスはそれぞれ15名程度、いろいろな国籍構成で、授業内はもちろん教室外でも積極的に互いに英語を使ってコミュニケーションをとるよう奨励されていた。基本、授業形態は教員と学生との相互あるいはクラスメートとのインターアクションが重視され、教員側からの一方的講義形態の授業はなかった。毎金曜日は本学学生のみを対象とした教員養成プログラム(Specialised Teacher Training Program)で、児童・生徒に対する外国語(英語)教授法をいろいろ学んだ。ただ4週目の金曜日は、K-12(3歳から12歳まで)を対象とした私立学校 Pulteney Grammar School を訪問し、授業参観、日本語の授業でのプレゼンテーションや生徒との交流をし、オーストラリアにおける教育現場を実際に体験した。

ホスト家族については、研修前に出したホストへの自己紹介や手紙、ELCによる各学生に対するアンケート結果などに基づき、それぞれ学生に一番ふさわしいと思われるホスト先が当てられていたようである。バックグラウンド、家族構成など様々であったが、それぞれ学生に対して大切に手厚く接してくれ、学生はより深いつながりが築くことができ、もう一つの「家族」発見となったようであった。授業プログラムに Tourist & Cultural Activities のような形で「観光」が入っている他大学の学生と異なり、ELC主催の地元探索ツアーのない本学の学生については、ホストファミリーがそれぞれ企画をして、ショッピング、ビーチ、動物園、ドライブ、親戚の家族の結婚式などに連れて行ってくれたようであった。

学生の帰国後に、ELCより学生の研修の成績およびその分析、本学研修プログラムに関するA4で6ページにわたる詳しい総評が送られてきた。その中の学生による評価では、授業内容全般とその教え方、教員養成プログラム内容、学校訪問、ホームステイなど全てにおいて6.5から7.0の範囲にあり(7=strongly agree, 1=strongly disagree)、プログラム全般について満足していることがわかる。また、学生によってその英語の力は異なっているものの、それぞれのクラス内で自信を持って積極的に授業に参加したとの指摘があり、また各学生の

授業での成績も高く評価されている。金曜日の教員養成プログラムの授業は、コミュニケーションとインタラク션을主としたアクティビティを取り上げ、授業の構成・運営の角度から主として行なわれ、学生にとっては新鮮で将来の自分のクラス運営に非常に役立つと映ったようである。この教員養成プログラムの一環としての学校訪問には、授業参観、日本語の授業での英語による日本文化に関するプレゼンテーション、現場教員や生徒との交流があり、担当教員、学生ともこの学校訪問を高く評価している。全体として、本学学生は積極的にかつ熱心にすべての授業やアクティビティに参加し、クラスメートとうまくコミュニケーションをとりまた助けたりし、アデレード滞在と研修を最大限満喫しているようであったとの評価であった。ホームステイについても学生の評価は高く、肩肘張らない環境で英語を使って話すことがとても良い経験であったようである。

ELC の評価は、プログラム関係者と学生に基づくものであるが、学生の反応については現地でのアンケートが英語によるもので、自由記述欄にはいろいろと書かれているが、十分に自分の考え・気持ちを表せなかったかもしれない。帰国後学生の提出した「海外研修」(2単位)のための研修レポートは、それぞれが一番研修の中で興味を持ったものについてまとめたものであるが、日本と異なる授業のやり方、特に全員黒板に向かって座る日本のやり方ではなく、サークルになりクラスメートの顔を見ながら座り、互いに意見を交換したり作業をする授業、ゲームを取り入れた教え方など、「教える」ことに関するテーマが多かった。同様に多かったのが、ホストファミリーや地元の人々との交流を通して感じたフレンドリーネスそして英語に対するものであった。特に英語については、「教科書に出てくるような完璧な英語」を話す必要はなく、いわゆる「ブロークンの英語」であっても大丈夫であること、実際自分が日本で話している日本語も教科書に出てくる日本語のようなものではないので、肩の力を抜いてコミュニケーションをすることが大事ということホストより教わり、気が楽になり、英語によるコミュニケーションを楽しむことができるようになったとのコメントもあった。

研修レポートとは別に、次回の研修計画の参考にと研修参加学生にアンケート調査をしたが、英語についても「現地の人たちが自分の言おうとしていることを聞こうとしてくれた」「英語をずっと生活の中で使い続けることができた」など積極的評価もある反面、授業の予習、復習、小テスト、プレゼンテーションの準備など英語を使つての授業に関して、慣れるまで最初は大変であったようでもある。「英語を使うことについて抵抗感がある」については「非常にある」が研修後「全くない」あるいは「少しある」と変化、「英語を使うことについて自信がある」についても「全くない」から「非常にある」あるいは「まあまあある」となる学生が殆どであった。「オーストラリア英語」について日本で接して来た英語とは異なり、最初は慣れずに大変だったが、だんだんと慣れるにつれて、むしろフレンドリーで気さくなこの英語が好きになったという学生もいた。また「プログラムの中でよかったもの」では、「学校訪問」と「ホームステイ」をあげている学生が多かった。ブッシュダンスをあげている学生もいたが、これは研修の時期にちょうど開催されていたアデレードの Fringe Festival というお祭りの一部で、世界中からもこの時期にいろいろなアーティストやパーフォーマーが来て公園や路上でパフォーマンスをして、オーストラリアの文化だけでなく国際的雰囲気を感じたのではないかと思われる。ここにも、学生が感想を述べていた「いろいろなバックグラウンドのオーストラリア人」から成るオーストラリアの一端を感じたようである。本学のホームページにも何人かの参加学生のインタビュー形式の感想が載せられているが、同じように積極的なものである。

最後に、今回のアデレード大学研修についての総括として、時期的には現地が夏の終わりということで気候的にも過ごしやすく、また Fringe Festival のようなイベントもあり、学生にとって楽しい時期であったと思われる。ELC では、教員、スタッフが親切・丁寧で、良い意味で外国人学生の扱いに慣れていて、学生も不安を覚えることが少なかったようである。英語授業、教員養成プログラム、学校訪問も学生にとっては非常に満足のいくものであった。ホストファミリーについても不満のようなことは聞こえて来ず、むしろ帰国後も学

生は緊密に連絡をとり続けていて、その繋がりが一過性のものでないことを示しているのは嬉しいことである。コロナ禍で復路に便、航空会社など変更があったが、出発・到着の時間については早すぎもせずまた遅すぎもしなかったという事で、学生だけでなくホストファミリー等にとっても楽であったと思われる。